
僕はヒーロー

広瀬亜紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はヒーロー

【ZPDF】

Z0442A

【作者名】

広瀬亜紀

【あらすじ】

カツブリングめちゃくちゃのギャグ小説。「アンパンマン」のキャラクターたちを「ナン（快斗もいるけど）」でやってみました。

(前書き)

アンパンマン 工藤新一
メロンパンナちゃん 毛利蘭
バタコさん 灰原哀
ジャムおじさん 阿笠博士
チーズ 服部平次
バイキンマン 黒羽快斗
子供達（アンパンマンには出ないけど） 歩美、光彦、元太

ある晴れた日。

「チーズ、チーズ、チーズ、チーズ

「・・・

「チーズ、チーズ、チーズ、チーズ

「・・・

「自分の名前も覚えられない能無し馬鹿犬」

「（ブチッ）犬ちゃうゆーとるやろうが！！」

ある家の庭で楽しそうに遊んでいるバタコさん（哀）とチーズ（服部）。

「なんでこんな首輪つけるん！？しかも人さらいや！…」

「あなたは捨てられていたのよ？」

「だから寝とつたんじや、ボケ！…！」

そう。このチーズは最近バタコさんが拾つてきた（？）人間…。
いや犬だった。

「こんな立派な家まで作つてあげたのにどこが不満なの？」
バタコさんが指差すその先には、どう見ても家とはいえない犬小屋が。

「どこもかしこも不満や」

「とにかくあなたは犬なのよ。（断言）ほおら！ボールを取つてきなさい」

チーズの言葉は完全無視でボールを投げるバタコさん。

「あんた絶対、遊んどるやン」

そこへバタコさん溺愛のアンパンマン（新一）登場。

「あーつっ！てめえ…また俺のバタコさんに近付きやがつて…！
殺すぞ！」（こら）

「あんた、正義の味方やろ」

「ちょっとアンパンマン。年下には興味ないのよ、何度も言つたらわかるの」

「どう考へてもダメ」「や」

「そんな・・・。ああ！俺はどひしたらいいんだ！！」

今会話でわかるよつてアンパンマンはバタコさんが大好きなのだ。

しかし、そのバタコさんは超年上好き。

「男は50過ぎなきゃダメよね」これが口ぐせである。

そして、そんなバタコさんに惚れていのアンパンマンは正義の味方なのに悪党に近いくらいの極悪非道。

バイキンマンの立場がなくなつてしまひほゞである。

「バタコさん・・・お家でお茶でも飲みましょ」

「・・・しようがないわね」

そう言つと2人は家に入つていつてしまつた。

「こんな奴らには付き合つてられん。はよ寝よ」

こんなおかしなところに連れられてしまつた可哀想なチーズはこの先どうなつてしまつただろうか。

「家の中」

「おおー！ちょっとよかつた！今、お茶を入れたところじや

そう微笑むのは優しく明るいジャムおじさん（博士）。

「なんてことすんだよー！ジジイー！俺が今やうつと思つたのこーーー！」

「・・・それは、すまんかったのよ」

「チツ！」

舌打ちまですると本当にヒーローか？アンパンマン。

「『めんなさい、ジャムおじさん』

「いいんじゃよ」

「あーっつーバタコさん、なんでこんなジジイにー。」

「だから私は年上好きなのよ、あなたなんかよりジャムおじさんの方が好きだわ」

「ええっつー?」

バタコさんの言葉にショックを受けたアンパンマンは黙り込んでしまった。

『ああー・・・どうして俺はあと40年先に生まれなかつたんだ・・・。どうにかして老ける方法はないもんかな・・・。』

そんなバカなアンパンマンに、とってもバカラしい案が思い浮かんだ。

「いいこと思いついた!」

「どうしたんじゃ? アンパンマン」

「亀を助けに行つてくるーー!」

そう言つとアンパンマンは勢いよく家を飛び出していった。

手には浦島太郎の本を持つて。

「あら? アンパンマンは?」

「亀を助けに行くそうじや」

「そう。また何を思いついたのかしら、あのバカは」

そんなアンパンマンはバタコさんにめちゃくちゃ言われているとも知らずに海へ来ていた。

『チツ! ちょうど亀を苛めてるガキなんていねえか・・・。』

そう思つた矢先に子供達がやってきた。

歩美、元太、光彦である。

「おー、そこガキ」

「あー！アンパンマン！！」

「亀、苛めてこい」

「「「…え？」」

突然のありえない発言に3人は同時に固まってしまった。だが、勇気ある3人はすぐにアンパンマンに反論した。

「どうして亀さんを苛めなきゃいけないのー？」

「可哀想です！！」

「俺達、少年探偵団にはそんなこと出来ねえよーーー！」

「亀さんだつて生きてるんだよー！」

「所詮、亀だ」

ヒーローがそこまでキッパリ言つか。

「それにアンパンマンは優しい正義の味方のはずですーーー！」

「優しい？正義？味方あ？」

そつまうアンパンマンには、真っ黒なオーラが漂つていたと囁く。

(後日談)

「つたぐーーー。」うなつたら自力で竜宮城に辿り着くしかねえな・・

アンパンマンはスタスタとその場を立ち去った。

／＼その頃のバイキンマン／＼

「あーあ・・・アンパンマンがあんなんじや俺、立場ねえじやねえか」

この物語で唯一悪者のはずのバイキンマン（快斗）がいた。

「つまんねえなー・・・散歩でもしよーかなー・・・」

そつまうとバイキンマンはさつままでアンパンマンがいた海へ向かつた。

「「ええーん！（泣）アンパンマンに苛められたあー・・・」

「俺、腹へって動けねえよー・・・」

「うわつっ！？どうしたんだよ？そこの3人！？」

「「「バイキンマーーん！・・・」」

そう言うと3人はバイキンマンに抱きついた。

「アンパンマンが苛めるんだよー！？」

「亀さんを苛めろって言つたのあ」

「とつても怖かつたです」

「はあ？？」

バイキンマンは意味がわからなかつたが、とりあえず3人を慰めた。そして歩美と光彦にはキャンディを元太にはづな重をあげ、そして去つていった。

「バイキンマンっていい奴だな

「そうだね」

「善い人街道まっしぐらですね」

そう呟くと3人も家へ帰つていった。

「その頃のアンパンマンへ

「くつそー・・・竜宮城つてどこだよ！？」

アンパンマンはまだ竜宮城を見つけられずにいた。

「おい！犬！？」

「なんや！てか犬ちやう！？」

「んなこたあどうでもいい！それよりお前、竜宮城知らねえ！？」

「は？・・・竜宮城つてあの？」

「そうだ！あの浦島太郎で有名な！？」

「ぶつ！？」

チーズはアンパンマンがあまりにも変なことを真面目に言つるので噴き出してしまつた。

「なんだよー?」

「お前、それ本気で言ひとんのか?」

「当たり前だ」

「ぶつ!…!ギャハハハハハハ!…!…」

「だからなんだよー?」

「アホやー!アホにもほどがあるー!…」

それからチーズは暫く腹を抱えて爆笑していた。

そこへアンパンマンの親友・メロンパンナちゃん(蘭)がやつてきた。

「アンパンマン」

「あつ!メロンパンナちゃん!…」

「久しふりね!」

そう言つとメロンパンナちゃんは一少「ワリと微笑んだ。

「そうだなー」といひでさー!竜宮城つてどーにあるか知らない?…?

「ぶつ!…!」

チーズはまた爆笑し始めた。

「竜宮城?それは海底にあるから行くのは無理よ

「でも浦島は行けた!」

「ああ知らないの?浦島太郎は半漁人なの」

「ええつ!…?」

これにはチーズも吃驚して笑うのをやめた。

「あそこに行くにはエラないと無理、無理!…!…

「そうなのかー!くつそー!…!」

「…お前ら、絶つつ対アホやん」

「うしてアンパンマンは竜宮城行きを諦めた。

「でも、どうして竜宮城なんて行く?と思つたの?」

残念そうにしてこるアンパンマンにメロンパンナちゃんが聞いた。

「バターハンは超年上好みなんだよ。だから竜宮城へ行つて玉手箱をもらひ、おじいさんにならうと・・・」

「なーんだー！ そうだったの！ でもプレゼントの方が効果あると思わよー！」

「へ？」

「高級品・・・例えば宝石とかをプレゼントするのよ」

「なるほどー！ ありがとうメロンパンナちゃんー！」

何を思ったかアンパンマンは、また走つてどこかへ行つてしまつた。

「そして~

「ギャー——————ツツ——————！」

バイキンマンは悲鳴をあげた。

「おつおつ俺の宝が・・・な——————」

そう。なんとアンパンマンがバイキンマンの今まで盗んだ宝物を全て盗んでしまつたのだ。

「許さねえつーどこだアンパンマン！ ！」

そう言つとバイキンマンは家を飛び出していった。

数日後、戦争が起つたのはいつまでもない。

(後書き)

作者より

どうでしたか??珠翠月様のお話を読んで私も書いてみたい!と思つてやつてみました。

なんか最後オチとか全然なかつた・・・。

やっぱギャグは難しいですね。

こんな作品でも感想いただければ嬉しいです!!
でわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0442a/>

僕はヒーロー

2010年10月17日07時30分発行